



鳥居觀音と水野梅曉



水野梅曉先生像

滝沢邦行筆

鳥居観音と水野梅暁

はじめに

鳥居観音の境内に水野梅暁先生の墓があります。

これはどういう関係の方ですか、と問はれる方がありませんので、その関係についてお話し致しましょう。そもそものはじめは、今から四十余年前、梅暁先生が脳溢血で倒れました。柳川博士の麹町病院に入院され、暫らくしてほとんど恢復されましたが、尚後遺症があつて、転地療養の必要があるということからです。

柳川博士は夫人が埼玉県名栗村平沼家の出身で、転地療養には丁度よい所だということで、平沼家へ頼んできたのであります。柳川夫人は桐江先生の妹なので、快く承諾してお迎えしたわけです。先生は寝

台車で送られて来たのでありますが、三ヶ月間規則正しい日課を過されて、忽ち散歩も出来るようになりました。

それ以来平沼家とは一族のように親しくし、柳川家とも懇意にして、令嬢柳川弥生さんの結婚の時には、その媒酌人をつとめております。

平沼家療養中のことや、柳川家との親密なことは、水野梅暁追懷録の中で、平沼とみさん、柳川弥生さんが、思い出を書いておられます。

先生が高血圧で倒れますと忽ち関係者に知らされましたが、麹町病院入院中は面会は許されませんでした。名栗で静養するようになると、川島浪速、小村捷治、後藤朝太郎、佐々木照山の諸氏が見舞に訪れました。浪速翁は此頃相当耳が遠くなつていま

したので、長時間筆談されました。この人は庸親王の姫を養育した人で、有名な川島芳子はその姫です。頭山満、犬養毅、重光葵氏からは長文の見舞状がきました。重光氏は其頃爆弾で受けた足の傷療養に別府に居て、切々とした手紙であります。

先生は起きられる様になりますと村道を散歩します。その後から子供たちが「鳥居のオヂイチャン」といいながら大勢ついて歩きます。先生は子供たちと共に虫類や小動物を集めて遊び相手になり、袂には菓子を用意して分け与えました。先生の食事には山野菜を集めまして、それを工夫して差上げますと、非常に喜んで何でもうまいと言います。食事の時の姿、子供と遊ぶさまなど、良寛さまもこの様だったろうと思うほどであったとの事であります。先生は書道の手本をたくさん持つてきておりまして、漢魏六朝のものだというのをよく習っていました。先生の書は原拓を手本にして根気よく習ったものであります。

平沼弥太郎先生に、桐江という雅号をつけたのも此

頃で、これは後漢の光武帝の竹馬の友であった嚴子陵という人の故事からとっております。

こうして平沼家との縁が出来まして、先生は気が向いた時飄然とやって来るのが常でした。先生は春風のようにもあり、台風のようにもあり、又野分の風の様でもありました」と平沼とみさんは書いておられます。健康恢復してから先生が名栗へ来る時には、必ずといってよいほど小村侯と同伴であったとの事で、これは先生が漢詩を作ると、小村侯はすぐこれを俳句で応酬するので、大いに楽しい仲間として喜んでいた様です。この応酬の様子は小村侯の隨筆にくわしいので、水野梅曉追懷録に全文のせてあります。平沼桐江先生が観音堂を建てるべき発願して、最初に今の恩重堂の所に観音さまを安置しましたが、内部の左右の柱かけは先生の揮毫、堂の前の額は鈴木天山禪師が施無畏と題書されました。又それより一段上の今、地球愛護観音のある所に、小さな亭がありました。これも先生が息心庵と名付けられ、独特の字で題額されました。

大東亜戦争もはげしくなつて、東京も空襲されるようになりましたが、先生はご自分も荷物も疎開されようとしたしません。そこで平沼家からトラックを持って行きまして、先生のお荷物の一部を名栗の納屋へ運んだのであります。

その後先生の家も焼けてしまい、転々と疎開されておりました先生は、荷物の疎開はほとんど忘れて去つていたようであります。

「先生のお荷物は家で預つておりますよ」と言はれて、おおそうだったと気がつかれた様子でした。

昭和廿一年になつてから、小金井の幡随院や岩槻の慈恩寺へ行つていた先生は、いよいよ玄奘三蔵の塔を建てることに腹をきめ、独特な方法でその資金の勧進をはじめられました。そこで又時々東京へ出る度毎に、江古田の平沼家を訪づれるようになり、名栗にある自分の荷物を整理することも考えられたのであります。

筆者は昭和二十二年の八月だと思ひますが、先生の案内で名栗の平沼家を訪ひ、ここで先生のお荷物、

主として書画文献書籍の類ばかりであります。その整理のお手伝いをさせて戴きました。

これは奥さんに上げる、これは文庫を作つてそこへ陳列する、これは君に上げよう、といった具合に、先生はどんどん区別して行かれます。珍しい写真や書いた物など出て来ると、整理の手をやめて、その懐しい思い出を語り出しますが、そんな時の先生の眼は子供のようによろこびで、そのお顔は気高いものがありました。

その時整理は三分の一も出来ませんでしたので、又来年ということになりましたが、それ以後先生は名栗を訪づれることは出来なくなり、筆者が代つて二十年近く、毎夏少しづつ整理して終つたのであります。

昭和二十四年に慈恩寺で遷化され、翌年総持寺で本葬が営まれて、恩師根津一先生のお墓の隣に葬られました。その際名栗と福井へ分骨されたのであります。

先生が亡くなられて三十年になりますが、この鳥居

観音に對してのお導きは大変なものであります。先生の縁でお詣りになる方が絶えませんので、出来るだけわかりやすくこれを説明してみたいと思います。

生いたち

先生は広島県福山市東町で、明治十一年一月二日に生れました。お父さんは金谷俊三、お母さんはマツといいました。

五人兄弟の四男です。お父さんは善吉と名をつけました。小さい特別に弱いという方ではなかつたのですが、小児ぜんそくがあつて、五六才の頃はずいぶん苦しんだということです。

六才の時ちよつと小耳にはざんだところによると、隣町にぜんそくによく効くお灸の先生があるらしい。そこでこのぜんそくを癒したい一心で、両親にとわりなしに出掛けて行つたということです。

漸く灸療師の家を尋ねあて、のこのこ入つて頼みました。灸療師は小さい子供が灸をすえてくれというのですからビックリしました。そこでいろいろ聞き

正してみると、本人大変に真劍です。だが親の依頼もないのに灸をすえて、後で文句を言はれてはたまらないと思つたのでしよう。

この近くに親戚はないかと聞いてみるとありました。そこへ行つて了解を得て漸くおろしてくれたとの事、これは昨日の事のようにおぼえていると、先生から直接聞いたことがあります。

先生は小さい時から坊さんに興味を持っていたようです。大勢の坊さんが揃つて托鉢にくると、どこまでもその後をついて行くのでした。

先生のお父さんは福山藩士族でしたが、同じ藩士で水野桂巖という人がありました。この人は廢藩置縣の後僧侶になつて、法雲寺という曹洞宗の寺に住持となつていました。

そこへ先生は貰はれて行きました。小学校一年生くらいの時ではなかつたかと思はれます。法雲寺の子として小学校へ通い、四年か六年かわかりませんが、とに角卒業して、正式に水野桂巖師の下で頭を剃

り、僧侶の第一歩を踏み出したのであります。この時が十三才だったと申されました。

大徳寺高桐院での修業

師匠が言い出したか、本人の希望だったかよくわかりませんが、十三才の年に京都へ行って修業することになりました。その頃熊本県士族で、学識高い居士がありました。高見祖厚という方で、大徳寺の塔中高桐院に居られました。居士であつたか僧籍にあつたかわかりませんが、どの本にも居士とありますので、そうだろうと思っております。今祖厚居士の長男の奥さんくにさんが九十三才(五十二年現在)で相模原市に健在ですが、伺つたことがございませ

ん。
先生はここで祖厚居士から、きびしい指導を受けたのであります。後に先生は筆者に、高桐院での祖厚居士の教育が、私の生涯を決定するものになった、と話しておられましたからその影響は大したものがあります。十年以上経つて長沙で活躍している時も

、日常の茶飯事までも祖厚居士へ手紙で知らせております。明治の遺賢であつたよき師にめぐり逢つたことは先生にとつて最大の仕合せだったと思います。大徳寺塔中といえば臨濟宗本山の中にあるものです。曹洞宗の小僧が臨濟の柑錘かんすいを受けたわけであり、祖厚師の指導を受けること両三年で東京へ出ることにになりました。

東京での勉学

汽車賃と小使十三銭で京都を出て、途中腹を空かせたが、よい人にめぐり逢い、東京での第一夜は車中で会つた紳士の家へ泊めてもらったが、眠ろうとすると観音経を読む声が聞えます。そつと覗いてみると親切にしてくれたその人です。佛様の加護とはこういうことかと感じたそうであります。一人前になつてからこの恩人をさがして礼に行つたと言はれました。高見祖厚居士の紹介状によつて尋ねた寺の名は聞き洩しましたが、細川侯爵家のゆかりの寺であつたようです。その寺から東洋大学に聴講生とし

て学んだらしいのですが、此間のくわしい事はわかつておりません。

とに角正式には小学校を出ただけですから、中学高等学校大学と進むわけには行きません。修業の傍ら夜間聴講に出掛けるのがせい一ぱいだつたろうと思はれます。而し向学心旺盛な少年だつた先生は、貪慾なまでに学問を詰め込んだようであります。

その姿がたのもしく見えたでしょう。細川侯爵の目に止まり、やがて近衛篤磨公爵に紹介されます。

東亜同文書院

東亜同文会は近衛篤磨公を会長とした団体ですが、日清戦争の後、中国に東亜同文書院という学校を設けることになり、初代院長根津一先生が全国を廻つて生徒を募集しました。梅暁先生はこの話を聞き、勇躍これに参加することになりましたが、旅費も無ければ、着て行く服も靴も無い。行つてみた所で拂うべき月謝も食費も無いのです。その時先生を見込んで援助してくれたのが近衛公で

ありました。頭のとつぺんから足の先まで、みんな近衛さんのお世話になつた、といつて、公爵が正装した画像をかけ、感慨深そうに語つたことがあります。上海に行つてからは多く中国服を着ていたようで、鳥居文庫所蔵の写真の中にあります。

先生は同文書院第一回卒業生になっておりますが、これは根津院長の好意で、書生兼学生をしていて、その外一切の雑務を受持ち、不眠不休で働き且つ学んだのであります。

この就学中休暇を得て浙江省の天童山に登り、如浄禪師の墓塔に参拝、住持寄禪和尚と語り、日支佛教徒の交流や佛教興隆に関する意見を交換して、大いに意気投合したとのことあります。

長沙で布教に従事

同文書院の学業を終えた先生は、寄禪和尚の奨めによつて長沙に行きました。ここで長沙第一と言はれる開福寺の客となつて、直ちに湖南僧学堂なるものを開設しました。

が多くなっています。中央公論等の雑誌にも、いくつか執筆しておりますので、朝野の間に広く知られるようになりました。

ある晩高橋審視總監の招待で晚餐を共にしている時、隣室に頭山満翁が来ておられ、翁の客人を紹介されました。それが革命派の領袖孫文で、その席で頭山翁から革命派へ協力を頼まれたというのであります。

当時すでに中国全土に滅満興漢の気運は盛り上っていて、先生はその空気をよく知っております。清朝皇帝の政府は無力になり、各地の長官は中央の命を奉じません。

遠見的に見てこのまま推移すれば、中国は列強諸国の餌食になってしまいます。そうなれば日本の安全を脅すことになり兼ねません。中国が一つになって近代国家として再出発するために、革命も又やむを得ない、と先生は考えたようです。再び大陸へ戻った先生は、東京の有志と連絡を取りながら、革命派の援助を始めました。東京から武器を輸送すること

もやりました。

革命は明治四十四年に南からはじまりました。戦斗が各地で行はれ、死傷者が多く出るのを見た先生は、本願寺の僧という肩書で臨時野戦病院を作り、医師看護婦学生等多数を引連れて前線へと出て行きました。此頃すでに大谷光瑞師と手を組んでいたことがわかります。

その頃の手記を見ますと、三井物産上海支店に棺桶をたくさん注文しております。こういう戦争のさ中にあつて、先生の面目がよく出ているのは、戦斗が長びき両軍が疲れてくると、先生は赤十字の旗を立て、両軍の中間に割って入るのです。暫らく休憩して弁当でも食べろ、と言はんばかりの態度であつたと、古い先生の友人はその時の事を語りました。

両軍が射ち方やめとなれば、死傷者の収容がはじまります。こういう時敵味方の差別なくやるということでは、佛教に徹した先生でなくては出来ないことでもあります。これが三十三才の先生ですから驚きます。

戦斗が一時途絶え、中休み状態になった時、先生

は上海に在る鄭孝胥の寓居を訪ずれております。

この時鄭孝胥は先生に向つて、中国の内乱鎮圧に日本の援助が最も必要であると力説し、根津院長先生を通じて要路に要請してくれと頼んだということです。

これに対し先生は、日本の介入は問題を大きくするだけであるから、恐らく根津先生も賛成しまいと答えて辞去したと書いております。

辛亥起義より幾多の変化があつて清朝は倒れましたが、新しく出来た共和国は袁世凱を大總統に選びました。議会も開かれることになりましたが、袁の政治は恐怖政治であります。反対する者は皆消してしまふというやり方で、宛然袁世凱皇帝です。

この第一回議会が開かれれば、革命派は袁の提出した議案に反対することはわかつております。反対する者は皆逮捕投獄ということも自明の理です。

ここで同志相談して計画を立て、当日先生は傍聴席で大いに野次を飛ばす役を引受けたとの事です。議会は予想通り大荒れに荒れて解散します。外へ出た

同志が逮捕されないうちに、待たせておいた自動車で日本大使館へ送り込み、暮夜ひそかに日本へ亡命させてしまつたのであります。

先生はこれら亡命客の生活と各種の勉学のため斡旋しましたが、犬養毅、頭山満等の蔭の力になつて働いたのであります。

南岳衡山南台寺に大藏經を贈る

先生が中国佛寺と深い關係を持つようになつてから、色々な問題がありますが、聖地普陀山に問題が起り、寺が廃棄の運命にありましたが、画僧志円がひそかに渡航して先生の助力を乞ひ、先生が乗り出して政府と切衝し、存亡の危機を免れました。

又南岳の聖地南台寺では戦火で大藏經が失はれ、何とかして備えたいと熱望して、これを先生に頼みました。先生は帰国して奔走し、鉄眼版藏經を寄進しました。この壮舉は四方に喧伝され、文豪王闓運が文を練り、軍機大臣外務部尚書の瞿鴻禨がこれを揮毫して「日本僧贈藏經記」という巨碑を建立しました

。これは今でも存在していると思はれます。

支那時報の刊行

大正三年東方通信社が設立された時、先生は請はれて調査部長になりました。これは支那時事という月刊誌の発行が主なる仕事で、これは約十年間継続されました。中華民國が創立されて以来、徐々に統一へと向っていたが、尚各地に軍閥は割據していたのであります。

而し民国側の公共事業も多くなり、わが国へ発注する機器類も年々増加しました。民国政府は機械発注に当っては、先ず先生の所へ相談し、先生の推薦する会社と契約を結ぶ事が多かったとの事であり、先生は手数料も謝礼も絶対受取らない。もし謝礼を持参する者があれば、大喝一声怒鳴りつけ、追返すのが常だったというのであります。

関東大震災を契機に東方通信社は事業を縮少し、支那時事も廃刊されることになりました。ところが支那時事のような雑誌が無くなると、一般官庁商工会

議所等は大変不便になり、中国の事情がわからなくなるおそれがあります。

そこで先生は外務省や日華実業協会等の援助を得て、支那時報社を創立し、月刊誌支那時報を出すことになったのであります。

大震災時の活躍

大正十二年の九月一日、丁度昼食時にあの関東大地震が起きたのであります。先生は浴衣のまま外へ避難しましたが、忽ち朝鮮人支那人が暴動を起したというようなデマが飛び、先生は不安になり何が起るかわからない状態になりました。先生はすぐ行動を起し、山下汽船に馳せて行って汽船をチャーターし、あらゆる手を盡して在留中国人を集結させ、直ちに上海に向けて出帆しました。

上海に船が着き、先生が第一番にタラップを降りて行くと、口々に先生を詰問しました。学生たちは驚いて駆け下り、事情を説明したので、不安は解消して感激の声が挙りました。

先生は兼て懇意にしている大実業家で書画家でも名高い一亭居士をはじめ、有力者に逢つて震災の実情を知らせたので、それは大変だ、すぐ日本を救えということになり、日災救済会が出来、特に佛教団体の音頭取りで義捐金が集められ、これが東京へ送られたのであります。

当時の新聞や号外等、上海で印刷されたものがありまして、今は台北の歴史博物館に保存されております。

その後中国の佛教団体代表多数が慰問と犠牲者の法養に來日したので、外務省の囑託になつていた先生は、これを迎えて斡旋したのであります。更にその後中国佛教徒として、本所被服廠跡の震災記念堂に、大きな梵鐘を送つて來ました。

時の市長永田秀次郎さんは青嵐と称して有名な俳人でもありましたが、局長連の前例のない贈物は受けられないというのを支持して、言を左右にして受取ろうとしません。先生は卓を叩いて大喝一声、隣国の好意を無視して何が前例だッ!とすざましい形相

を見せたので、永田さんアツサリ膏を脱いでしまつたということであります。

各宗の名僧を中国に案内

岡部長景先生は、追懷録の中に書いております。

「師は明治の中葉より終始彼地と往復し、足跡全土に洽ねしというも過言ではないが、嘗て伊藤忠太博士より、聞いた挿話であるが、同博士が天童山を訪い、寺僧と種々筆談された時（かつて日本画僧雪舟遊学したることありや）と問われたところ、寺僧の答えに（我雪舟を知らず、日人水野梅曉來遊したることあり）と書いたそうである」

又「同君の支那語は流暢というわけではないが、地を行く四十年の体験により、意思の疎通には事を欠くことなく、学者の机上の研究とは趣を異にし、所謂文を以て友を会するのであつて、多数の碩学文人名僧は勿論、政治界経済界の名士と親交を結んでおる」とも書いておられます。

大正十四年日本佛教会の企画で、各宗派の主だつ

た人々が渡航することになりましたが、この旅行計画から、案内通訳まで、一切先生が引き受けております。

この頃外務省には岡部長景先生が居られて、文化事業局長でありましたので、外務省の力の入れ方も大変なものだったとの事であります。この時受入側の中国の有名寺院では、何百人という一山の大家が集り、最高の歓迎をしております。

当時中国政府の交通部長は葉恭綽氏ですが、先生とは懇意な間柄なので、特別列車を仕立てて、いつでもどこでも待っていてくれたとの事で、国賓として扱ってくれたわけです。

文化外交

辛亥革命から中華民国が発足しましたが、暫らくは統一の無い軍閥割據の状態が続きました。黎元洪、徐世昌、曹錕、段祺瑞、呉佩孚、馮玉祥、張作霖等が地方軍閥の巨頭ですが、先生は呉佩孚を訪うたこともあり、張作霖を除く五人とも文通しております。

す。而し後に張作霖は写真に爲書して三回も送って来ております。

先生は終始孫文の国民党を支持しておりますが、文化交流と親善のために、他の軍閥の巨頭連とも接触していたようであります。黎元洪や馮玉祥は度々手紙を寄せています。

上海事変が起り、日貨排斥が激しくなっても、先生の大連との往来する態度は変わっていません。中国の国益と日本の国益が一致しなければならぬ、と先生は考えているので、日本との戦争は避けなければならぬとして、当時軟弱外交と言はれた幣原外交の外交方針の支持者であったわけです。

満洲の文化財保存

満洲国が出来、鄭孝胥氏が國務総理になると、先生はすぐ満洲に出掛けて行きました。先生の旧知である鄭孝胥は遠大な理想を實現しようとしておりましたが、この理想は余り理解されておりません。先生は麥利隆松井石根の両將軍とは親しかつたのです。

が、軍が主導権を握る満洲の政治には賛成出来ない
ので、鄭総理との私交だけに留めておいて、大切な
民族の遺産である文化財の保護に専心したのであり
ます。

日満文化協会創立の案を作り、京都大学の内藤湖南
博士をはじめその道の権威者を網羅して満洲に乘込
みました。建国大学の創設、熱河離宮の保存修理や
満洲版大蔵経の発見、宋以後の絲繡画多数の保存、
博物館の建設など、八面六臂の活躍をされておりま
す。

これらは後に日本の敗戦によって、ソ連軍と中共軍
が満洲に入ったので、今はどうなっているか知る由
もありません。

日支事変から大東亞戦争

先生が支那通であるということ、犬養総理初め
外務省でも尊重して、大切な事はよく相談されたよ
うであります。又陸軍の軍務局長も同様でしたが、
小辻軍人の中には、犬養が中国べったりなのは水野

が居るからだとして、五・一五事件の時など刺客を
指し向けたのであります。而し土足で踏み込んだ軍
人達に対し、先生は落ついて説得して歸らせており
ます。近衛首相が蔣介石を相手にせずと声明して、
中国との話合いは途絶えたのであります。が、實際は
中国との和平交渉はありました。

先生は支那時報が休刊しなければならぬような状
態になりますと、大東亞省の囑託として、重大問題
の相談に乗っていました。

玄奘三蔵の靈骨捧持

昭和十七年の春、南京で玄奘法師の靈骨が発掘さ
れました。石棺の中には石に刻した記録があつて、
第六回の改葬されたものであります。

此の靈骨を中国側へ渡しますと、日本佛教徒へ半分
贈与するという事になって、当時の佛連会長と先
先とが南京に赴き、重光大使と共にこれを受領して
日本へ帰りました。

その後戦争は熾烈になつて、東京も空襲されるよう

になりました。こんな時は誰も靈骨をかまっている人はありません。先生は水晶の盒に収めた靈骨を抱いてあちこちと疎開したのであります。

その為めに今日慈恩寺、鳥居觀音、弘前市、台湾日月潭等に奉安することが出来たのであります。近頃聞く所によりますと、慈恩寺の靈骨を奈良の薬師寺へ移すという噂がありますが、先生は慈恩寺の塔に生命をかけたのであります。

仮りに安置したわけではありません。全日本佛教会の役員会に、忝つて、みなさんの承諾を得たから、生命をかけたのであります。

もし薬師寺へ移すとしたら、泉下の先生はやはりニッコリと笑つて納得いたしますでしょうか。

靈骨塔半ばにして遷化

慈恩寺の離れは風流な部屋で、先生はこれを無量寿庵と名付けておりました。ここの住職大島見道師と図つて、建塔を發願したわけでありませんが、先生は老軀をおして東奔西走、その資金を勸進されまし

た。あの塔は元東京根津美術館の所にあつたものであります。タイ国から贈られた佛舍利を奉安してあつたのですが、敗戦と共に佛舍利はどこかへ持ち去られました。これは占領軍の命令だつたとのことです。

先生はその空いている塔に眼をつけ、根津氏に交渉して無償で譲り受けたのであります。

而し塔身は無償であつても、これの解体運搬建立には大変な資金がかかります。先生は二十万円の予算だとおっしゃつておりましたが、果してどれだけ集つたでしょうか。

基工式が終つた後、名古屋日泰寺の佛舍利奉安五十年祭が行はれることになりましたが、この時先生は靈骨を奉じて名古屋に赴き、東山動物園の象に乗つて、市内を行進しました。

一生一代の離れ技をやつて、日泰寺の行事を壮にし、玄奘三蔵法師靈骨塔建立のために、あらかじめ布石したという事が出来るかと思ひます。

出發前から健康を害していた先生は、この行事に

よってひどく疲れたようであります。随行の大島師も心配して、途中沼津市三津の岡部長景先生の別墅に立寄り、ここに一泊してよく晴れた富士山を前に、靈骨供養を行いました。

次の日慈恩寺に辿り着きましたが、それから病状は悪化し、ついに昭和二十四年十一月廿一日溘然として遷化されました。次の日暴風雨の中で密葬が行はれ、東京神奈川埼玉千葉静岡等から多数参列されました。

翌年になって鶴見の総持寺で本葬が行はれ、その塋域に葬られました。その時鳥居観音と福井市の山本様へ分骨されたわけがあります。先生の総持寺のお墓は、故東亜同文書院々長根津一号山洲先生のお墓の隣りでありまして、これは生前こと定めてあったのであります。恩師のお傍にという兼ての念願であります。

その後養子水野明氏およびその実父小寺一郎氏の力で、大きな墓碑が建てられました。此碑は友人を代表して岡部長景先生が撰文揮毫されたものであります。

す。

水野梅曉の本領

筆者は先生と書いてきましたが、本当は僧侶でありまして、老師又は禪師と呼ぶのが正しいのであります。而し鳥居観音の関係者一同、何十年となく先生、梅曉先生、水野先生と呼び馴れてきました。「私は僧俗半々さ」と先生は笑って言いましたが、その精神と行事は、終生一步も僧から離れておりません。眞骨頂佛者であります。曹洞に籍を置いて臨済を学び、事業をやる時には眞宗とも提携し、日蓮宗とも協力する「わしはお釈加様の直弟子さ」というわけであります。全然宗旨に拘泥しておりません。先生は儒教道教をも究め、わが国学にも蔵経深かつた人ですから、漢詩文、短歌、論文等々自由自在で、著者も左の様にたくさんあります。

支那の変局(大正十年東方通信社刊)

東亜佛教大会記要(大正十五年日本佛教聯合会刊)

日本佛教徒訪華録(昭和三年日本佛教聯合会刊)

支那時報叢書

第一輯支那佛教近世史の研究(大正十四年)第二輯支那佛教の現状に就いて(大正十四年)第三輯西藏佛教及英藏關係第四輯支那に於ける新宗教の設立運動(昭和二年)第五輯蒙古采襲と一山國師の帰化(昭和四年)第六輯日支交通の資料的考察日韓交通篇(昭和四年)第七輯同隋唐交通篇(昭和五年)第八輯同隋唐文化移入篇(昭和六年)第九輯同平安朝文化発達篇(昭和八年)第十輯同日本文化大成篇(昭和十一年)滿洲文化を語る(昭和十年)東方文化の復興(昭和八年)

この外に中央公論、現代等に多数の論文を寄稿しており、一冊にまとめてない文章が、支那時報には数限りなくあります。

先生は正義漢熱血漢でありまして、日本人としての真骨頂を発揮した人であります。日本のためになることは、同時に中国のためになることでなければならぬと考へて、先ず中国人の日本理解に役立つことをやり、日本人の中国に対する偏見を是正する為

めに努力されました。先生は宗教家であると同時に学究的な文化人でもありますから、いわゆる支那浪人とは大いに異なるのであります。慈恩寺の玄奘三蔵靈骨塔が完成して、尚餘命があるならば、明窓浄几の下、静かに著述でもしたいと言はれたことがあります。

それがかなはなかつたことは、先生にとつて千載の恨事と言ふべきでありましょう。

終りに高い心境と雄大な規模を示す先生の代表的な詩を掲げて擲筆いたします。

冬度洞庭 (冬洞庭を渡る)

日没平沙不見山。月流水底響潺潺。旁人誰識箇中樂

。一葉扁舟天地間。

(日は平沙に没して山を見ず。月は水底に流れて響潺々たり。旁人誰か識らん箇中の樂。一葉の扁舟天地の間)

水野梅曉追懷録

松田江畔編

(執筆者) 佐々木信綱、岡部長景、太田外世雄、井坂秀雄、海原宏文、藤井草宣、田中清、平沼とみ、山本勇吉、山本峰子、柳川弥生、大島見道、小村捷治、松崎鶴雄、松田江畔
(付録) 六休詩抄

☆昭和四十九年出版、非売品なるも希望者には二〇〇〇円にて頒布

☆残部多少あります。鳥居観音庫裡受付でお尋ね下さい。

鳥居観音と水野梅曉

昭和五十四年八月第一版発行

執筆者 松田江畔

表紙画 柴田桃圃

発行所 埼玉県入間郡名栗村

宗教法人 鳥居観音

電話(〇四一七) 九一〇四一七

(施本)

白雲山 鳥居観音 観世者センター案内図

